

看護学科学生のパーソナリティと教育に関する研究

—クレペリン検査と成績の関係—

内田 宏美, 任 和子, 猿田 裕子, 若村 智子*, 兵藤 好美
近田 敬子*, 豊田久美子, 祖父江育子
中井 義勝, 小西 昭

The Relationship between Personality Traits and School Records of the Nursing Students

Hiromi UCHIDA, Kazuko NIN, Hiroko SARUTA, Tomoko WAKAMURA*, Yoshimi HYODO,
Keiko CHIKATA*, Kumiko TOYODA, Ikuko SOBUE, Yoshikatu NAKAI
and Akira KONISHI

ABSTRACT: We studied the relationship between the results of the Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test (UK) and school records of nursing students admitted to our college from 1987 to 1989. Of 240 students, 213 were examined.

We obtained the following results:

1. Ninety-two percent of the students scored within the 'wholesome' category on UK, these are considered the group who will work efficiently and show great adaptability to circumstances.
2. Only 7 of 213 students remained in the same grade or left college before graduation, and hence their traits of 'temperament and behaviour' were hard to confirm statistically.
3. Since the 'general evaluation' of UK is significantly related to school records in the professional lectures and second-year clinical practice, UK will be a useful reference in predicting the ability of students in a certain circumstances.
4. Since a significant relationship between UK and school records in third-year clinical practice was not confirmed, UK may not be a useful reference in predicting the all-round practical ability of students. Further studies are necessary to confirm the validity of UK related to nursing education. An adequate evaluation system for students' clinical practice must also be discussed.

Key words: Nursing students, School records, Personality traits, Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test

京都大学医療技術短期大学部看護学科

Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University

*兵庫県立看護大学

*College of Nursing Art and Science Hyogo

1994年3月5日受付

はじめに

人が人を世話する原始的な看護は有史以来のものであるが、いわゆる近代看護としてその専門性を主張し始めたのは、ナイチンゲール以降（1865年頃）のことである。

看護界では、看護過程を活用して、科学的問題解決に基づく看護ケアの体系化を図ることにより、看護の専門性を打ち立てようと努力してきた。一方、看護過程の中で人間を統合してとらえきれぬかの疑問から、看護の本質であるケア／ケアリングの概念が注目されてきている。筒井が、「ケアリングは、看護にとっては健康をゴールとしたプロセスであり、人間関係であり、感情であり、科学的知識とヒューマニスティックな行動のバランスである。従って、ケアリングには感情的な看護のスキルと技術的な看護のスキルの2つの重要なカテゴリーがあり、専門的な看護実践の先行条件として、知識、技術と共に、倫理的・道徳的要素や感情を含む態度が必要とされる¹⁾」と述べているように、我々は、看護婦には知的学習能力とバランスのとれた人間性が求められると考えている。看護基礎教育において、臨地実習は、この2つのスキルが統合され得る場として重要である。

ところが現在の入試制度では、学力試験で知的学習能力を測れても、入試段階で看護者に必要とされる資質を問うことは困難であり、すべては入学後の教育にゆだねられている。当学科においては、複数担任制をベースに、実習担当教官、ゼミ担当教官が学生をサポートしている。しかし、1学年80名、1教官当り10名の実習学生に対する対応は充分とは言えず、問題行動が

おきてから対応を迫られているのが現状である。

我々は、できるだけ早期に個々の学生のパーソナリティを理解し、早期に適切な関わりを持つことにより、学生の適応をたすける必要を感じてきた。そこで、その方法を探る一助とすることを目的として、1978年以降、毎年新入生に対して入学直後に行われている内田クレペリン精神検査（以下UK）と、入学後の学業成績との関係について検討した。

研究方法

1. 検査法概要

UKは、連続加算作業と作業心理を研究したKraepelinの連続加算法を、内田勇三郎が、気持ちや動作の働きぶりの傾向をみる心理テストに発展させたものである。

心的活動性と呼ばれるこの傾向は、能力や性格・行動の基底にあり、その人らしさをつくりだす基本的、恒常的傾向である。UKでは、「知能、仕事（作業）の処理能力、積極性、活動のテンポ、意欲、気働きの高低」、「性格、行動ぶり、仕事ぶりといった面の特徴（くせ）・かたより・異常・障害などの程度と内容」が分かるとされている。作業は「1分単位の15分作業-5分の休憩-15分作業」で実施され、結果は表1及び図1のように作業量、作業量の変化（定型との隔たり）、誤りの状態などから24の類型に分類され、さらに実用上いくつかの群に分類される²⁾。

2. 検査期間、検査手続き及び対象

1987～1989年度の各入学期に、本学部の心理学担当教授等が監督して、欠席者を除く入学者

表1 UK結果類型・群別表

10 群 別	第 1 群	第 2 群	第 3 群	第 4 群	第 5 群	第 6 群	第 7 群	第 8 群	第 9 群	第 10 群
類 型	1 (a)	5 (a' ~ af)	7 (af)	11 (af) ~ (fa)	13 bf	16 (fa)	18 bf ~ (fb)	20 (fb)	22 fp	23 d
	2 a		8 af		14 c					24 dp
	3 (a')		9 b		15 c'					
	4 a'		6 a' ~ af		10 b'					12 af ~ (fa)
5 大 別	高度定型群		定型群	準定型群		非定型群		重度非定型群		
3 大 別	定 型 群			準定型群		非 定 型 群				
2 大 別	定 型 群					非 定 型 群				

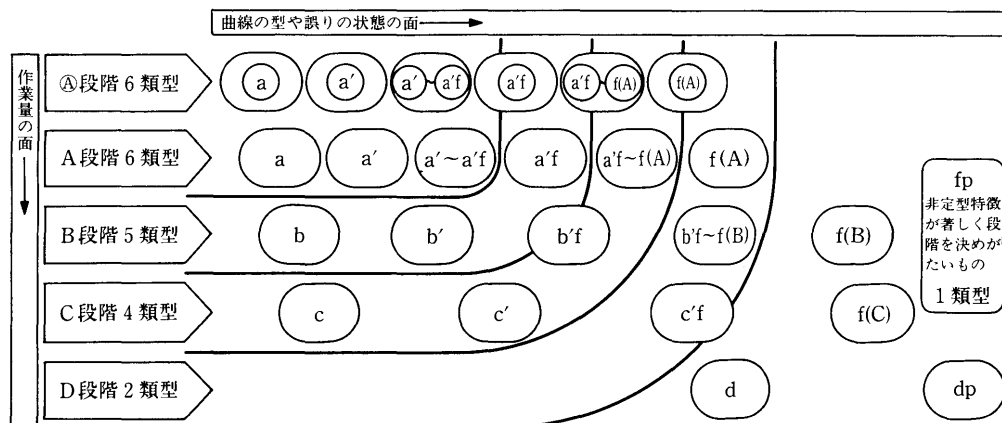


図1 曲線類型関係図式

全員に集団式で UK を実施した。

検査期間中に京都大学医療技術短期大学部看護学科に在学したのは、男子1名、女子239名の計240名であった。その中でUKを受けた男子1名、女子212名の計213名を対象とした。対象者の在学年数別内訳を表2に示した。在学年数等の数字3は、当学部の規定最低年数（3年）での卒業を、4と5は留年した年数を含む卒業までに要した年数を示している。

3. 結果の処理方法

UKの類型分析等は、日本・精神技術研究所

に依頼した。

入学後の成績は、一般教育科目と専門科目への取り組みの違い、講義と直接患者等を対象とする臨床実習との違いなどをみることを意図して、次の8群に集計分類した。一般教育科目成績総計、専門基礎科目成績総計、専門科目（講義）成績総計、2回生臨床実習成績総計、3回生臨床実習成績総計、全臨床実習（2回生と3回生の臨床実習）成績総計、専門（専門基礎科目、専門科目の講義及び全臨床実習）成績総計、全成績の8群である。UKの結果は、総合評価は「高度定型群」「定型群」「準定型群」「非定型群」「重度非定型群」の5群、もしくはこれらに準ずる「定型」「非定型」の2群に、作業水準は「水準が高い」から「はなはだしく不足」までの5群に、「特性別傾向」は「発動性」「可変性」「亢進性」のそれぞれについて「不足」「中等度」「過度」の3群に、また、「特異傾向」は有、無の2群に分けて、一元配置分散分析によりUK結果と学業成績の関係を調べた。さらに、在学年数とUK結果について調べるため、通常的年数の卒業生（正規卒業群と称す）と留年・退学者（留年退学群と称す）の2群に分けてUK結果を比較した。

結 果

1. 看護学科入学生の一般的特性

仕事ぶり、行動ぶりの面でのバランスやかた

表2 対象者の在学年数別内訳

		性 別		在 学 年 数			
		男	女	3 正 規 卒 業	4	5	退 学
					留 年		
'87入学	人	0	62	58	1	0	3
'88入学	人	0	79	78	0	1	0
'89入学	人	1	71	70	2	0	0
小 計	人	1	212	206	3	1	3
総 計	人	203		206	4		3
正規卒業	人	1	205	206			
留年退学	人	0	7	7			

よりの程度をみる曲線類型³⁾ 人員分布に関しては、全体に「高度定型群」「定型群」が多く、「準定型群」を含めた定型の割合は91.5%に達する。仕事の処理能力、行動のテンポ、積極性や意欲、気働きなどの程度を示す処理能力速度（作業水

準³⁾の傾向では、「水準が高い」者が77.5%、「不足はない」者が21.6%で、高い水準を示している。性格・行動のバランスやかたよりでは、状況に応じた適度な行動、及び、問題無しを合わせた「適応傾向を示す」者が78.4%で、残

表3 UK集計結果一覧

	総合評価5群別					処理能力速度傾向					性格行動のバランスかたより				
	高度定型	定型	準定型	非定型	重度非定型	水準が高い	不足はない	いくらか不足	かなり不足	不足はない	状況に適した行動	問題なしかたより	不適切な行動	不適切な行動	不適切な行動
UK被験者(人)															
1987年	18	35	6	3	0	44	18	0	0	0	18	35	6	3	0
1988年	25	33	13	6	1	65	13	1	0	0	26	33	13	6	1
1989年	28	26	11	3	4	56	15	1	0	0	28	27	10	3	4
被験者総数	71	94	30	12	5	165	46	2	0	0	72	95	29	12	5
%	33.3	44.1	14.1	5.6	2.3	77.5	21.6	0.9	0	0	3.8	44.6	13.6	5.6	2.3
正規卒業群	71	90	29	10	5	160	44	2	0	0	72	91	28	10	5
%	34.5	43.7	14.1	4.9	2.4	77.7	21.4	1.0	0	0	35.0	44.2	13.6	4.9	2.4
留年退学群	0	4	1	2	0	5	2	0	0	0	0	4	1	2	0
%	0	57.1	14.3	28.6	0	71.4	28.6	0	0	0	0	57.1	14.3	28.6	0

												特異傾向										
発動性				可変性				亢進性				抑制作用減退	一時的停滞	一時的たかぶり	情意不安定	感動性不足	反発・不熱心	発動の障害	気力の衰退	あせり変調	りきみ変調	固執傾向
不 足	中 程 度	過 度	不 特 定	不 足	中 程 度	過 度	不 特 定	不 足	中 程 度	過 度	不 特 定											
12	33	16	1	13	43	5	1	21	31	9	1	0	2	2	0	2	1	0	1	3	0	0
16	38	21	4	21	42	13	3	31	34	10	4	0	5	1	2	0	0	2	7	0	2	0
7	44	17	4	16	43	9	4	16	37	14	5	0	10	1	0	0	0	1	1	0	0	0
35	115	54	9	50	128	27	8	68	102	33	10	0	17	4	2	2	1	3	9	3	2	0
16.4	54.0	25.4	4.2	23.5	60.1	12.7	3.8	31.9	47.9	15.5	4.7	0	8.0	1.9	0.9	0.9	0.5	1.4	4.2	1.4	0.9	0
33	112	52	9	50	121	27	8	64	100	32	10	0	16	4	2	2	1	3	8	3	2	0
16.0	54.4	25.2	4.4	24.3	58.7	13.1	3.9	31.1	48.5	15.5	4.9	0	7.8	1.9	1.0	1.0	0.5	1.5	3.9	1.5	1.0	0
2	3	2	0	0	7	0	0	4	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
28.6	42.9	28.6	0	0	100	0	0	57.1	28.6	14.3	0	0	14.3	0	0	0	0	0	14.3	0	0	0

りの約20％に適応の幅の狭い傾向がみられる(表3)。

性格や行動の特徴を生じさせる心の働きの基底にある傾向を示す「特性別傾向」(発動性・可変性・亢進性)³⁾では、いずれにおいても「中等度」が5～6割を占めているが、「不足」がそれぞれ16.4％, 23.5％, 31.9％あり、特に持続の様相を表す可変性・亢進性において不足傾向を示す者の比率が高い(表3)。

一方、延べ43名が、心の働きの著しいかたよりや強い変調(特異傾向)³⁾を示している。中でも、気分や感情や行動の動きが一時的にとだえたり、滞ったりして、ぼんやり状態や放心状態におちいりやすい「一時的停滯傾向」や、気分・感情や行動に十分な心的エネルギーが不足している状態にある「気力の衰退傾向」³⁾を示す者が、それぞれ17名、9名あり、他の「特異傾向」に比べて有意差はないものの比率が高

い傾向にある(表3)。

2. UK 結果と学業成績との関係

心的活動性の全体的傾向を示す「総合評価」³⁾と学業成績との関係では、専門講義に対して危険率1％水準で、また、2回生実習に対して危険率5％水準で有意な関連性がみられる。「作業水準」と学業成績との間には有意な関連性はみられない。「曲線類型判定」(定型・非定型)と学業成績とでは、専門講義・2回生実習との間に、それぞれ危険率1％・5％水準で有意な関連性がみられる。「特性別傾向」の「発動性」「可変性」「亢進性」と学業成績との間には有意な関連性はみられない。「特異傾向」と学業成績との間では、「発動の障害」にのみ一般教育・専門基礎、及び、専門総計・全成績との間には危険率5％水準で有意な関連性がみられる。数量的評価では、「曲線類型判定」を

表4 UK 結果と学業成績の関係

項 目	一般教育	専門基礎	専門講義	2回実習	3回実習	全実習	専門総計	全成績
総合評価(1)			**	*				
総合評価(2)			**	*				
作業水準								
定型・非定型			**	*				
特性別傾向								
発動性								
可変性								
亢進性								
一時的な停滯								
発動の障害	*	*					*	*
気力の衰退								
誤答・答もれ								
訂正								
行飛ばし								
PF 値			**					
修正 PF 値			**					
前期平均								
後期平均								
全平均								
後期上回り			*					

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

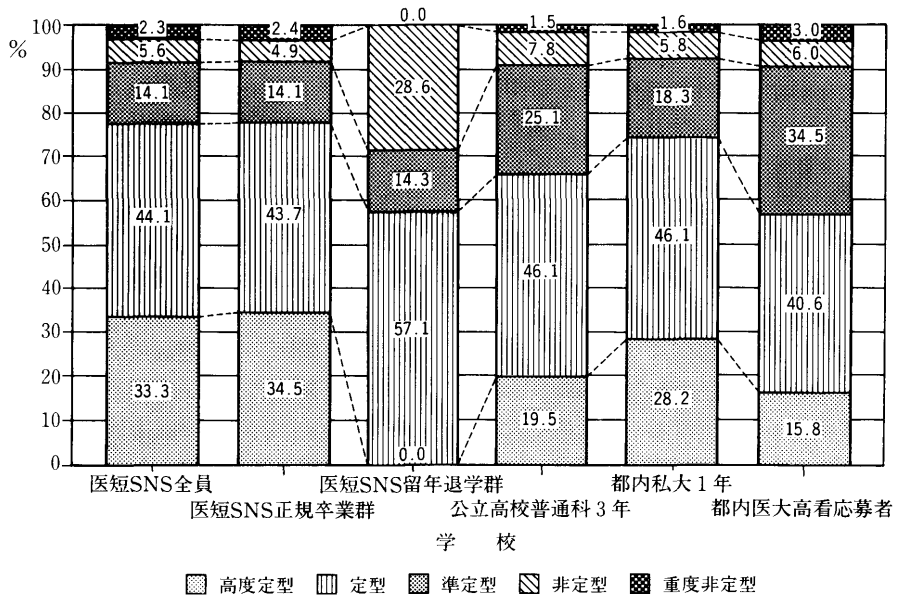


図2 学校別UK総合判定分布

数量化した「PF値」「修正PF値」と専門講義との間には危険率1%水準で有意な関連性がみられる(表4)。

3. 在学年数とUK結果との関係

留年退学群は213名中7名にすぎないため、単純に正規卒業群と比較することはできないが、留年退学群には「高度定型群」「重度非定型群」がなく、「定型群」の割合が多いが、全体として定型の割合が低い傾向がみられる(図2)。また、「作業水準」では処理能力速度傾向には差はないが、性格行動のバランス・かたよりでは適応傾向を示す者の割合が少ない傾向がみられる(表3)。

考 察

1. 看護学科入学生の特性

表3の処理能力速度傾向にみるように、「水準が高い」「不足はない」者の比率がそれぞれ77.5%, 21.6%, 合計99.1%あり、作業能力水準の高い集団である。また、図2に示す曲線類型人員分布の比較をみると、定型に属する者の

比率が高い都内私大1年の「高度定型群」28.2%, 「定型群」46.1%に対して、本研究の対象群のそれは各々33.3%, 44.1%であり、年代差はあるが、「高度定型群」が多い傾向がみられる。大橋らが昭和53年度から57年度に行ったUK調査結果⁴⁾と比較しても、「高度定型群」「定型群」の比率が共に10%程度高くなっており、「準定型群」を含む定型の比率は87.2%から92.0%に増加している。これらから、作業能力水準が高く、性格や行動面にもかたよりのない、バランスのとれた適応の幅の広い、選抜された集団としての傾向が高まっていることがうかがえる。当学科は入学時には面接等は実施しておらず、学科試験のみによる選抜であるが、昨今の医療職への関心の高まりの中であって、看護に求められる大切な資質の一つである作業水準、適応性に優れた学生を確保できてきたと言える。

一方、同じく表3の「特性別傾向」をみると、「可変性」「亢進性」において不足を示す者の比率が、各々23.5%, 31.9%と高い傾向にある。又、延べ43名に「特異傾向」がみられ、中でも

「一時的停滞」や「気力の衰退」を示す者が多いことから、やる気を維持させる点で問題を抱えた学生が多いことがうかがえる。これは、われわれ教官が日々の学生との関わりにおいて実感している「与えられた課題には熱心に取り組むが、自ら課題を見つけることのできない学生が多い」現象として表れている。その根底には、主体性の不足・未成熟の問題があると思われる。本学科入学以前の受動的な学習経験や、青年期特有の発達課題をを考慮しつつ、看護を学ぶ意義を自ら明らかにしていくことができるような、学習への動機付けに対する教育的関わり必要性が示唆される。

2. UK 結果と学業成績との関係

表4に示されるように、「特異傾向」の中の「発動性の障害」と、主として1回生で行われる一般教育・専門基礎との間にのみ有意な関連性がみられることから、「特異傾向」を示す者は、新しく始まった大学生活への不適応を起こしている可能性が示唆される。

一方、「総合評価」及び「曲線類型判定」と、専門講義・2回生実習との間に有意な関連性がみられる。講義では、1回生の出席率に対して2回生の専門科目は出席率も高く、学生のやる気も高い印象から、おそらく、目的の明確な教科では学生の本来の能力が発揮されやすいことが関係しているのではないかと考えられる。もちろん、講義の中では学生が看護の専門性への評価を最も受けることになる専門講義との関係がみられる点から、UKを看護に必要な基礎的能力を予測する一つの参考資料として活用することは期待できる。また、伊藤らが指摘しているように、本学科入学後初めての臨床実習である2回生実習は、学生が特に対人関係に対して大きなストレスにさらされる場であり⁵⁾、個々の学生のつまずきが表面化しやすい場面として、従来より重要視され、慎重な対応を努力しているところである。この経験から、2回生実習のように、学生が必要以上に緊張しやすい場面での、対人関係を含む環境への適応能力を予

測する資料として、UK結果の活用の可能性が示唆される。

他の科目、特に、クライアント・その家族・スタッフ・教官等との対人関係を築きながら、既習の知識・技術を統合して個々のクライアントの看護に応用していくという、総合的・実践的な能力を求められる3回生実習とUKとの間には有意な関連性はみられない。3回生実習と2回生実習の特徴を比較すると、2回生実習は初めての臨床実習で学生の緊張も高く、1週間という短期間で課題も限定されている。他方、3回生実習は9カ月にわたる長丁場で緊張を持続しにくい上、課題の幅も広がり、かつ、個性が要求されるため、主体性・統合性・適応性など人間的な成熟が求められるようになる。このような多くの課題と長期間取り組む状況では、心的活動性の傾向はとらえにくくなるのではなかろうか。UKは個々人の本来的な性格特性を調べる検査⁶⁾ではあるが、UKの判定だけで、3回生実習のような、対人関係のダイナミクスを基盤としたケアリングの能力が判定できないのは、しごく当然のことだといえる。看護実習は、その特殊性故に、評価基準を客観的に示しにくく曖昧であることから、実習評価の妥当性がしばしば問題となる。しかし、当学科に於いて、UKと3回生実習の関連傾向がみられないという事実から、実習担当教官全体が、単なる到達度評価にとどまらず、人間的成熟によるケアリングの能力評価を行おうとしている様子がうかがえる。

以上より、UKを入学後の看護の学習全体にわたる能力、特に、3回生実習を中心とした看護の総合的実践能力を予測する資料として、安易に用いることはできないと考える。

3. 在学年数とUK結果との関係

正規卒業群と留年退学群との間で有意差が認められるUK結果は、「誤答・答洩れ」と「PF値」であり、又、行動特性の比較でも、気持ちや動作の立ち遅れや持久性の弱さを示す者の比率が高いことから、留年退学群には集中力が不

十分に適切な行動が遂行できにくい傾向がうかがえる。しかし、調査対象者 213 名の内、留年退学者はわずか 7 名にすぎず、これだけのデータから留年退学者群の性格特性の傾向を限定するのは危険であり、個別の分析が必要と考える。

当学科では、昨今の人材確保の社会的要請が高まる中で、選別し振り落とすのではなく、学生の努力によって課題をクリアできるように、教官が強力にサポートする方向での教育を行っている。従って、留年・退学に至った学生だけでなく、強力なサポートを要する学生（仮に境界群と命名する）にこそ、真の問題が潜んでいると言える。そこで、境界群が多く含まれている可能性のある「特異傾向」を示した学生の分析、及び、講義の成績と実習成績との相関に関する追調査により、UK の看護教育に於ける有用性を検討する必要があると考える。

我々は、1 学年 80 名という多人数の学生のパーソナリティを理解し、看護の学習への適応をたすける方法を探りたいと考え、UK の有用性に注目して UK と学業成績の関係を検討した。しかし、今回の調査から、UK を看護教育に活用していくには、心理検査の基本にたしかえて、複数の別の側面からの性格テストと共に総合的な判断を行うことが不可欠であると考えに至った。これらの検討を踏まえて、改めて看護教育に於ける UK の有用性と適用について問い直したいと考える。

ま と め

1987～1989 年度の 3 年間に、京都大学医療技術短期大学看護学科に入学した 240 名の学生の内、213 名の内田クレベリン精神検査と学業成績から次の結果を得た。

①「高度定型群」「定型群」に属する者の比率が高いことから、この集団は作業能力、適応性が高い。

②最終的に留年・退学に至った学生数が 3 年間で 7 名と少なかったため、問題行動を起こしやすい学生の行動特性傾向は明らかにできなかった。

③UK の「総合評価」と専門科目・2 回生実習との間で、それぞれ危険率 1%・5% 水準で有意な関連性がみられることから、課題の限定された場面での学生の適応状況を予測するための参考資料として、UK の有用性が示唆される。

④ 3 回生実習と UK との間に有意な関連性がみられないことから、UK は看護の総合的な実践能力を予測するための参考資料とはなりにくい。実習評価の妥当性と共に、看護教育全般における UK の適用について、今後検討の必要がある。

稿を終わるにあたり、UK の特性等に関するご指導と類型分析等でご協力いただいた、日本・精神技術研究所 瀬尾直久氏に謝意を表します。

文 献

- 1) 筒井真優美：ケアリングの概念・看護研究 1993; 26: 2-13
- 2) 外岡豊彦監修：内田クレベリン精神検査・基礎テキスト 増補改訂版 第13刷。東京：日本・精神技術研究所 1990; 1-122
- 3) 日本・精神技術研究所資料：内田クレベリン精神検査・判定結果解説：1-16
- 4) 大橋ミツ、川井 浩：医療技術短期大学部学生のパーソナリティと教育に関する研究（第1報）。京都大学短期大学部紀要 1982; 2: 56-67
- 5) 伊藤好美、近田敬子他：初回病棟実習教育の明確化に関する研究—学生の気がかりとその対処傾向—。第22回日本看護学会集録（看護教育）1991; 185-187
- 6) 塩見邦雄、千原孝司、岸本陽一：心理検査法。京都：ナカニシヤ出版、1991